

水壺集

秋繭の荷出しを明日に眠りこけ

宮下 明子

秋、繭の出荷の時です。繭の中のさなぎは呼吸しているの
で、繭を積み重ねておくことはできません。短期間に集中して
行う作業ばかりです。出荷までの状況を「眠りこけ」と詠み、
良質の繭を送り出す喜びに伴う労働の厳しさを秘めて表現しま
した。

大夕焼かつて煙を噴きし山 余米 重則

過去一万年以内に活動した火山を氣象庁は活火山と定義して
います。昔あった休火山という言葉は今使いません。活火山
のほとんどは休んでいるからです。噴煙を上げた火山も緑豊か
な山容を見せています。見事な夕焼が包み込んでいる光景に、
この山は噴火する山だと認識をあらたに眺めたことでしょう。

納涼や幽霊役の肝っ玉 中嶋 文子

町内の納涼大会での出し物に幽霊役が登場して、幽霊役は
肝っ玉がすわってないと務まらないなあと見た感嘆の声です。

八月の初め頃、旧暦の七月七日に行われる沖縄の七夕は、先
祖の供養の行事です。お盆前の墓参りで、墓掃除をし、線香や
茶を供え、七夕であることを告げて盆の案内をする行事です。
そのような地域の風習を詠んで伝える一句だと思いました。

すべて子の手の内にある墓参り 梅谷 和声

子どもの幼い頃から墓参りに伴い、自分で仕切ってきた墓参
を子の世代が執り行ってくれるようになった年月の経過です。

揃ひたる稲の穂並の方里かな 山田 良一

一辺が一里の正方形の面積が方里です。一里四方に稲が台風
の影響も受けずに穂並が揃う状況を詠み止めました。

帰り行く小さなリュック夏終る 鴻坂 佳子

幼い背に小さなリュックを背負って帰って行けば夏が終わり
ます。寂しさを小さなリュックに集約させて情を抑えました。

鳳仙花真似て弾けてみたきとも 稲葉 良雄

鳳仙花の熟れた実は触ると弾けます。一瞬の勢いが面白くて

帆船の帆を張りてより秋立ちぬ 宮澤 淑子

大きな帆船が一斉に帆を広げるのが総帆展帆です。海王丸だ
と二九枚の帆があり、年間一〇回ほどこの総帆展帆が見られま
す。立秋に出会った総帆展帆への挨拶の一句だろうと思います。

宿題を机の端へ梨を剥く 大口 彰子

宿題をする子の一休みの景がほのぼのと伝わります。やりか
けの本やノートを机の端に寄せて、美味しそうな香りの梨を剥
きました。秋の午後のひとときです。

水室集

踊り潰す郡上踊の下駄の数 中島 冬子

郡上踊は、郡上市八幡町で開催される盆踊です。日本三大盆
踊の一つで、見る踊ではなく踊る踊と言われるように、浴衣で
下駄を鳴らしながら参加します。踊り下駄を履いて参加し、独
特の音が一体感を醸し出し、徹夜で踊ります。踏みならして潰
れた下駄の数に注目して、郡上踊の特徴を明確に表現しています。

七夕を旧暦となし墓手入 屋嘉比順子

片っ端から触ってみます。その感触に、ふと日頃の我が身も真
似て弾けてみた少し思わせぶりですが共感します。

秋螢こいこいと呼ぶ鬼貫忌 原田松三郎

上島鬼貫は八歳の時に「こひこひといへど螢が飛んでいく」
と詠んだと言われる伊丹出身の俳人です。その鬼貫に因んだ
「鬼貫青春俳句大賞」は、一五歳から三〇歳未満を対象に公益
財団法人柿衛文庫の主催で、新作三〇句を募集しています。そ
の鬼貫の忌日をうまく詠み込みました。

初秋や桂姿に紅引かれ 鈴木 春菜

桂は「うちき」と読みます。公家装束を構成する着物の一つ
で女性の衣です。その装束を身につけて、日頃の素顔に紅を引
かれたという一点で、作者自身の実感を言い止めました。

縹色の袂豊かにうすもみぢ 福田 将矢

桂に対して直衣(のうし)が公家の男性の装束で、光源氏の
姿です。その直衣の色が縹色だという句です。古来の藍染めの
色の名で、藍よりも薄く、浅葱よりも濃い色合いを言います。
その袂がふっくらとしている男性の装束の優雅さに薄紅葉を合
わせて詠みました。